

かたりべ 63

豊島区立郷土資料館だより

戦時債券と募集ポスター

☆二〇〇一年度第一回収蔵資料展
《戦中・戦後の区民生活》から☆

現在開催している今年度第一回の収蔵資料展で、収蔵展示室に入っすぐのガラスケースの中に、ずらりと戦時中の様々な債券が並んでいます。これらは、膨大な戦費を賄うために発行された国債や貯蓄債券です。

日中戦争がはじまった一九三七（昭和一二）年から、数多くの種類の債券が発行され、その購入が奨励されました。ア

ジア太平洋戦争が終結する一九四五年までの間に十種類以上の債券が、延べ二百回以上にわたって発行されました。

これら「支那事变国債」や「大東亜戦争国債」などの債券は、ポスターなどでも盛んに購入が呼びかけられました。それらのポスターには、兵士の姿や戦艦、軍用機、戦車、砲弾などの絵柄のほか、必ずといっていいほど「標語」が掲げら



「大東亜戦争国債」募集ポスター 館蔵



戦時貯蓄債券 大山和雄氏寄贈

れており、戦意の高揚と戦費の増収が図られました。
また、貯蓄債券や報国債券などには宝くじのような番号が付けられており、当選すると割増金がもらえました。当選番号は『週報』などの刊行物に掲載されていました。

戦争が長引くと、町会や隣組などに購入金額が割り当てられ、なかば強制的に徴収されるようになりました。戦時特別報国債券（豆債券）や戦時郵便貯金切手（弾丸切手）のような額面が小額のものは、子どもにまで購入の呼びかけがなされました。子どもの財布まで軍事費調達の対象されたのです。

これらの債券類は戦中・戦後のインフレなどによって値打ちが下がり、紙くず同然となりました。そして、償還を受けないまま、所蔵者の方々の手元で保管され、郷土資料館に収蔵されることになったものです。

（伊藤）

一年に一度ぐらい、戦争について考えたっていいんじゃない？

☆「戦中・戦後の区民生活」空襲・ヤミ市まで」開催中 ☆

▼二〇〇一年七月二十五日（火）から九月二〇日（日）まで

豊島区立郷土資料館では開館以来、継続してアジア太平洋戦争に関連した資料の収集につとめ、これらの資料の調査研究を進めるとともに、展示や講座を開催し、資料集を刊行してきました。一九九五年には特別展「戦争と豊島区」を開催し、それ以降、戦時中の区民生活を中心として展示を構成してきました。

ミ市も含めて、戦後までを視野に入れた収蔵資料展となっています。

■ 戦争への道 ■

戦時態勢に備えるための生活を国民に強いるため、様々な広報活動を通じて巧みな宣伝が行なわれていました。音楽や芸能までも戦争へ国民の意識を動員するために利用されました。

政府の政策を下達するために特に重要な役割を果たしていたものに、『週報』と『写真週報』があります。

『週報』は一九三六（昭和一一）年一月から一九四五（昭和二〇）年八月まで十年間にわたって刊行された政府刊行物で、敗戦と同時に廃刊になるまで四四二冊が刊行されました。発行部数は一八〇万部とも二百万部とも言われ、読者数はその五倍以上と想定されています。

記事の執筆は各省が必要に応じて担当し、敗戦直後まで政府の公式見解を掲載し続けました。むろん戦況などは正確な情報ではありませんでしたが、それが国民に知らされる全てでした。また、戦時

体制に国民を順応させるために「国策標語」も掲載されました。

当初、表紙が緑地の紙を使用していたため「緑の週報」とも呼ばれていましたが、物資の節約からか一九四三年一月二月発行の三二二号から白の表紙に緑のインクで筋を入れたものや「週報」の文字の部分だけに緑のインクを重ねたものになりました。また、戦況が悪化してきた一九四四年九月四一四号からは黒一色の表紙となり、「緑の週報」ではなくなりました。

一方、写真週報は『週報』の姉妹誌ということで、一九三八（昭和一三）年二月一六日に創刊され、「大衆向きとして程度を下げる」という方針で編集されました。また、写真投稿の募集で「映画を宣伝戦の機関銃とするならば、写真は短刀よく人の心に直入する銃剣でもあり、何十万何百万と印刷されて配付される毒瓦斯でもある」とも述べている文章は、当時の政府の国策宣伝に対する姿勢を表した象徴的な文章だと言えます。

途中から、ほぼ毎号掲載されるように



「週報」 伊藤章氏寄贈

■ 戦時下の生活 ■

総力戦となったアジア太平洋戦争において、人・物・考え方などすべてが戦争に動員されていきました。人々は隣組を通じて相互監視の下に置かれたり、衣料品・食料品が配給制になるなど、苦しい生活を強いられました。

戦時体制下では、物資の生産が軍需に偏ったため生活物資が極端に不足しまし



「紀元二千六百年」レコード

亀山勝敏氏寄贈

た。戦争当初は消費節約を呼びかけていたが、それだけでは対処できなくなり、一九四〇（昭和一五）年からは配給制度となり、通帳や切符がないと物品が購入できなくなりました。着るものは衣料切符で点数制となり、食べるものは家庭用米穀通帳・家庭用蔬菜購入票（野菜）や家庭用品購入通帳（味噌・醤油・菓子・酒・砂糖・塩など）で購入することとなりた。そのほかに生活に必要な燃料・石鹼・マッチなども配給制度の対象となりました。

■ 学童疎開 ■

都市部の防空態勢を整えるため、あるいは次の時代の戦力を培養するためとして学童疎開が実施されました。豊島区の国民学校の学童は長野・山形・福島各県へ集団疎開をしました。一九四四（昭和一九）年七月から一年余りもの長い期間、苦しい生活を強いられました。疎開先では、寂しさ、ひもじさ、悲しさ、いじめ、あるいは、疎開先の人々の温かい対応など、様々な体験が見られました。

■ 空襲 ■

一九四四（昭和一九）年八月、アメリカ軍によりグアム・サイパン島が占領されると、日本は本土空襲の危機にさらされることになりました。配備されたばか



1945年4月14日早朝の巣鴨二丁目付近
須田進二郎氏／仁科雅夫氏提供

りのアメリカ軍B-29爆撃機の航続距離内に日本全土が覆われ、度重なる空襲にさらされることになりました。

豊島区は、一九四四年一月一二日の初空襲から数えると十回の空襲にみまわられています。それらの犠牲を総計すると死者九四一人、負傷者三九五二人、被害者一六万九三九二人、罹災家屋四万九五六戸に及びました。中でも一九四五年四月一三日の空襲では豊島区を含む東京北西部に対して焼夷弾爆撃が行なわれ、豊島区では死者七七八名、負傷者二五二三名、被害者一六万一六六一名、罹災家屋約三万四〇〇〇戸という被害を生じさせました。

■ ヤミ市の頃 ■

空襲により焼け野原となった池袋の駅前に、敗戦とともに長屋式のマーケットや露天商からなる「ヤミ市」がたちはじめました。

このヤミ市は、戦後の生活が窮迫していた時代には不可欠なもので、公的な配給制度や公定価格などの不十分な部分を補うものでもありました。そして、戦後の驚くばかりの急激なる経済復興や、庶民生活の向上の原点となったとも考えられます。

池袋におけるヤミ市は「連鎖商店街」とか「戦災復興マーケット」などと呼ばれ、ある程度組織的な建設・経営がなさ



西口マーケットの路地 高木進一氏提供

れていました。東口のマーケットは戦後間もなくの一九四六年（昭和二一）年頃に成立し、人々の生活を補っていました。その営業内容の内訳は、酒を中心に提供する店舗が一二三軒、食事を主として提供する店舗が一八軒、甘味店舗が一六軒、食品材料・製品を販売する店舗は二六軒、衣料・靴などを商う店舗が一四軒など、二八一軒の店舗が営業していました（一九四七年六月調）。

一方、西口のマーケットも東口と同様に大きな商店街を形成していたわけですが、こちらは徐々にその地域は狭くなっていきますが、一九六二（昭和三七）年まで営業が続けられており、ヤミ市の名残のマーケットとしては、最後まで残ったものの一つと言えるでしょう。

（伊藤）

【八月のアンケートから】

◎立教とその周辺の被害地図が興味深かった
（41歳・男性）

◎戦争への道というコーナーで知らないことが沢山ありました。人の思想をやつることのおそろしさを今伝えていますか
（45歳・男性）

◎興味深く拝見しました。小さいながら意欲を感じました。あの戦争を風化させてはいけないと思います。

（67歳・男性）

連載「職人と地域の歴史」(1)

邦楽器の音色を決める糸職人 ― 早川喜由さん・池袋 ―

ものづくりの技と伝統を支えてきた職人さんの仕事をおして、現在のわたくしたちの生活と地域の歴史について考えてみたいと思います。ここでは、現役の職人さんをはじめ元職人さんにもご登場いただきます。また、当区にゆかりがある歴史上有名な職人さんについても、実績を発掘し紹介していきたいと考えています。では最初に、現役の糸職人である早川喜由さんのお仕事を紹介しましょう。

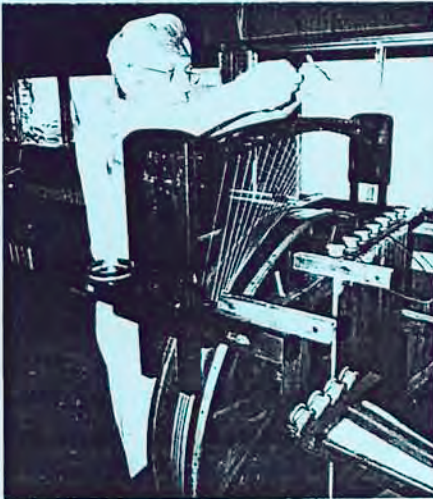
◆生糸を“絃”に

琴・三味線・琵琶・胡弓等の絃をよく見ると、何本もの細い糸が束ねられ、それが固く撚られていることがわかります。このような邦楽器の絃には、絹糸が使用されてきました。しかし、邦楽器用の糸は、絹織物用の糸に比べて乾燥度が低くなくてはなりません。このことは現在でも変わらぬ条件で、そのため、糸の湿度が適度に保たれる滋賀県の湖北地域で製造される糸が良いとされています。

ところで、そこで製造された糸がすぐに邦楽器の絃として使えるというわけではありません。次に、糸を撚るという工程があり、それを専門とする職人さんの腕が必要になるのです。つまり、早川さん

のように、生糸から完成品としての絃を生み出す職人さんの技術なくしては、邦楽器の絃は生まれません。

◆“撚り”をその日の天候で加減する



左：1943年から使用している木製の八丁撚り機。円形部が回転して糸が撚られる。
右：八丁撚り機から引いた糸の端を約15m先に付ける。決め手になる回転数と速度は経験による職人の勘。かけた撚りを元に戻さないためには技術が必要。

三味線の糸の場合を例にした邦楽器の

絃の製造工程は、およそ、①繰糸②合糸③寸法取④目方合わせ⑤撚糸⑥染色⑦糊煮込⑧糸張⑨乾燥⑩選別⑪節取⑫糊引⑬乾燥⑭切断⑮紙付⑯糸巻⑰出荷という順序になります。熟練者の早川さんは②③④ですが、ふつうは③④⑤です。

では、⑤を中心にみていくことにしましょう。糸は撚ることで強くなり、その加減で使用目的に合うものになります。糸を撚る道具を八丁撚り機（はっちようよりき）といい、手動・電動で動きます。これを使う場所を撚り場といい、長くて広い空間で、床が板の間になっている木造の建物です。先に述べたように、邦

楽器用の糸は乾燥を嫌います。そのため、ここでの作業には適度な湿度が必要になります。それも人工的ではなく自然な湿度、つまり天候や季節が選ばれるということになりますから、梅雨の時期が作業には最もふさわしいということも理解できます。

◆職人と“仕事の環境”

現在、早川さんのような仕事に携わる家（人）は全国で八件くらい、京都府と滋賀県に集中し、東日本では二件くらいといわれています。早川さん（一九二九年生まれ）は四代目です。初代は、足利（現栃木県）で機屋を営んでいましたが、お伊勢参りに行った際、三味線糸の職人と相部屋になったことがきっかけでその製造を始めたといわれています。二代目が郷里を離れ、四谷（現新宿区）で三代目とともに本格的に三味線糸の製造を行ないました。

その後、四谷の場所が手狭になったため、一九三〇年、当時は東京の郊外だった池袋（現在地）に転居しました。一九六〇～七〇年代にかけて池袋付近の環境が悪くなり、撚った糸が煤煙で汚れるようになり、そこで、工場だけを富士見市に移転しました。現在、その工場の近くには川が流れていますが、それは糸を撚るために適度な湿度が必要だからです。そういえば、池袋に工場があった頃、工場のすぐ横には、谷端川（現在は暗渠）が流れていました。

早川さんは、現在も邦楽器の絃を中心に製造をしています。それにとどまらず、医療・工業等の分野で使用される特殊な糸の受注もあり、日夜、試行を繰り返していらっしやいます。

（福岡）

博物館の図書室

—台北故宮博物院図書文献館—

展覧会に出掛けてもう少し展示について詳しく知りたい時に便利なのが、展覧会図録です。多くの写真図版を掲載し、解説、関連論文、参考文献も載っていて、展覧会での感動を持ち帰ることが出来ます。しかしこうした図録などは展覧会会場でない限り手に入りづらく、部数が限定されていて会期中でなければ手に入り難いものもあります。博物館に設置された図書室にはこうした図録、紀要、年報、調査報告書などの一般に流通しない図書が多く収蔵されています。

当館では展示室入り口に、当館刊行物の閲覧スペースがあり、過去の展示図録等を自由に御覧になれます。また研修室では、全国北海道から沖縄に至る博物館・美術館などから年間一〇〇〇冊ほど送られてくる図書資料を配架しています。一般の図書館では収集し難い種類の図書といえましょう。これらの図書は「郷土関係図書」として分類受入を行い、一般の書店で流通している「一般図書」とは分けて配架しています。残念ながら配架スペースの関係で書架を自由に御覧いただけませんが、ほとんどの郷土関係図書は職員が出し入れますので研修室

で閲覧していただけます。また今年六月より、『新着図書情報』を創刊し、毎月六〇冊〜二〇〇冊程度の新着図書をリストにして配布していますので参考にご利用下さい。

当館に限らず博物館・美術館ではこうした図書資料を閲覧できる図書室が設けられているところがあります。展覧会見学後のひと休みを兼ねて図書室に足を向けてみてはいかがでしょうか。新しい発見があるかも知れません。

● 台北故宮博物院 図書文献館 ●

中国茶人気につけ、足ツボマッサージ人気につけ、昨今台湾へ旅行に出掛ける人が多いようです。台湾に旅行に行ったことのある人ならおそらく一度は台北の故宮博物院を見学したことだろうと思います。故宮博物院は、とても広くてなかなか隅々まで見学することは出来ません。市内から少し外れているために観光バスで訪れる人が多く、見学時間も限られています。故宮博物院に行ったことのある人でも、図書文献館という図書館があることをご存知の方は少ないかも知れません。

図書文献館は、本館向かって左手高

台にある建物の二階〜四階にあります。利用は十八歳以上に限られますが、パスポートさえあれば日本人でも自由に見学できます。入り口にはいくつかのガラスケースで、図書文献館所蔵の貴重書が陳列されています。この建物の一階部分も展覧会を催していますから、故宮博物院は一日いても見学しきれません。

図書文献館の内部は非常に広々として明るい雰囲気です。清代文献、善本古典など貴重書の閲覧は事前の申込みが必要な場合もありますが、一般図書はほとんど開架式で自由にみられます。台湾では台湾語も話されますが、中国語が主になりますから、図書も中国語がほとんどです。北京出版図書、上海出版図書、台湾出版図書と広い中国中の図書が集められ、英文の洋書も数多くあります。面白いのは日本語図書コーナーまで非常に充実していることです。日本、中国、欧米の文化を比較して学ぶことも出来るわけです。内容は美術品に限らずとても広い分野に渡って収集されています。

中国語というのは面白いもので、まるで知識のない人でも漢字のおかげでなんとなく意味が分かるものです。ですから図録や写真集といった図版の多い図書は案外楽しむことが出来ます。今日日本でブームの中国茶ですが、茶壺(急須)の図録など日本ではなかなか見られないかも

しれません。故宮博物院の収蔵品は膨大で、展示されているものはごく一部です。図書文献館で過去の展示図録をながめるのも面白いでしょう。

図書文献館の内部は、天井が高く窓も大きくて、とても明るい開放感があります。書架も閲覧席も非常にゆったりとしていて、学生さんらしき人たちが読書に没頭しています。日本の図書館ではちよつと考えられないのは、学生さんたちがマイマグカップでお茶を飲みながら読書している光景です。おそらく一日中、いや何日もそうして研究に没頭しているのでしょう。(本を汚してしまうのでお勧めは出来ませんが。)ゆつくりとした時間のなかでより知識を深めて帰れば、展覧会見学の感動も長く記憶に留まることでしょう。

(葉師寺)



台北故宮博物院 図書文献館

博物館実習生を迎えて

今年も郷土資料館では、七月二十五日(水)から八月七日(火)までの二週間、博物館実習を行ないました。博物館実習は、教員の免許を取得するために母校などで教育実習を行なうのと同様に、博物館の専門職員である学芸員の資格を取得するために必要不可欠な科目です。学生にとっては、これまで大学で受けた講義や学内実習の総仕上げとして、博物館での実務実習は重要な意味をもっています。

今年は、昨年一二月から今年三月までに応募してきた学生を書類選考し、最終的に学習院大学、立教大学、帝京大学、立正大学の各一名と、東洋大学二名の計六名を受け入れました。以前は当館が歴史系の博物館であるという性格から、原則として歴史・民俗・考古学専攻の学生を受け入れ条件としてきましたが、近年は学芸員資格を希望する学生の学部・学科が多様化し(実際に職業につくかは別として)、歴史系専攻の学生に限定することは難しくなっています。今年は史学科が四名、応用社会学科一名、国際文化学科一名という内訳でした。学生の専門分野が多岐にわたることは、受入れ側として

やりにくい部分もありますが、地域博物館の果たすべき役割や学芸員としての心構え、必要な技能などは専門分野を問わず共通の課題ですので、実務実習ではこの点を重視して次のようなカリキュラムを組んでいます(カッコ内は時間数)。

①管理運営・事業運営の概要 (二)
②施設見学(資料館と区立雑司が谷旧宣教師館) (三)

③生活資料整理の方法と技術 (一二)
④文書資料整理・調査、報告書作成の方法と技術 (九)

⑤図書資料整理の方法と技術 (三)
⑥民俗・野外調査の方法と技術 (一二)
⑦文化財・発掘調査の方法と技術 (六)
⑧展示シナリオの作成 (二・五)

⑦は、資料館の事業と密接な関係にある、文化財の学芸員の協力を得て、文化財保護行政の現状や課題についての講義と現地見学を行なっています。

しかし、実習の最大の目玉であり、実習生が最も苦労するのが⑧の展示シナリオの作成です。これは二人一組となつて資料館が開催する特別展を企画し、テーマ、会期、展示構成、資料内容、見取図、印刷物、関連事業などを含めた展示シナリオを作成し、実習最終日に館長・学芸員を交えて発表・講評し合うものです。

スペースの制約から実際の展示室を使った展示作業はできませんが、今年は「文芸坐物語―ある名画座の歴史―」「かつて世界一と呼ばれた園芸の里 駒込・巢鴨」「豊島区に残る江戸時代の道―江戸時代の主要道と道しるべ―」の三本のシナリオが出されました。講評では、テーマの切り方や創意工夫すべき点、展示方法の問題点、パートナーとの協力のあり方など学芸員から厳しい意見も出しましたが、地域博物館に求められている展示テーマは何か、展示活動の基礎となる日頃の資料収集や調査研究がいかに重要かつ大切な仕事であるかなど、理屈でなく体で実感できる貴重な機会となったようです。

実習生には、終了後一ヶ月以内に「地域博物館の現状と課題」というテーマでレポート提出を課しており、それをもつて最終的な実習評価を行なうことになりました。そこで実習生が今回の経験から何を学び、現在の地域博物館に対する認識がどう変化したかが明らかとなるはずです。言い換えれば資料館が逆に実習生に評価されることになるのです。その意味で博物館実習は、これからの博物館を担う学芸員を養成すると同時に、博物館も自らの活動を振り返り、自己反省する機会であるといえるでしょう。

(横山)

編集後記

かたりべ63号をお届けします。7月25日から開催中の「戦中戦後の区民生活 展」は、新聞などで紹介され、区内外から多くの方が見学に来られています。資料館では毎夏、戦争を考える展示会や講座を行なっていますので、それを目当てに来館される方も増えています。▼8月の後半には、小・中学校の夏休みの宿題で、「昔調べ」の問合せの電話や来館が急に多くなります。でも当の本人より親たちが真剣になつて調べていることが多く、子どもたちが「調べる楽しさ」や「発見の喜び」を味わうチャンスが奪われてしまっているようう残念に思います。学校とは一味違った体験や発見を、子どもたちに提供する機会をもつと増やしたいと考えています。(横山)

かたりべ 63号
豊島区立郷土資料館だより

*

2001年8月31日
豊島区立郷土資料館
東京都豊島区西池袋 2-37-4
TEL 03-3980-2351
FAX 03-3980-5271